The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	唐代の中国初期形陶磁軍持に関する研究 : インドからの伝播とその成立
Author(s)	權, 相仁
Citation	デザイン理論. 2004, 45, p. 3-17
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53104
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

唐代の中国初期形陶磁軍持に関する研究
── インドからの伝播とその成立 ──

權　　相　仁
慶星大学校

キーワード
軍持，澡罐，細長頸瓶，尖台，添水台，
罐口台，軍持水羅法，濾過網

はじめに
一．軍持の語義
二．グプタ朝時代のインド軍持
三．求法僧などの軍持に関する記録
四．義浄の『南海寄帰内法伝』による軍持作法
五．７－８世紀のインドと中国軍持をめぐる背景
六．軍持と澡罐の同伴形式
七．初期の中国軍持遺物
おわりに

はじめに

インドでいわゆる軍持形の外形を持つ土器が流行したのは，紀元前後のクシャーン朝時代である。それらは遺物などから考察すると，尖台・添水台附着形であったと思われる。デリー・プラーナ・キラー博物館所蔵のⓐソームナートⓑラージガートⓒカウシャーンビーⓓラングマハルなどの地方から発掘された破片と，サーンチー考古学博物館所蔵の軍持の尖台と添水台形の破片などを通じて分析した結果，紀元前後に仏像が本格的に造像されはじめたそののち，約２－３世紀頃に軍持形瓶がインド全地域で作られ使用されたと思われる。

中国では５世紀初頃と７世紀中頃，グプタ朝時代のインドを旅行した法顕と玄奘の記録に君堀（法顕伝），捃稚迦（大唐西域記）と言う語が見出せるが，形状や細部構造，用途についてはまったく言及がない。また玄奘が中国へ帰国した645年以後，中国で軍持が作られたと言う事実を立証する正確な資料や遺物はない。中国で添水台・尖台附着形軍持が製作され，流行した時期は求法僧義浄がインドから帰り，洛陽と長安で経典翻訳の活動を始めた695年以後である。

本論では，４世紀中頃から７世紀初め頃，玄奘がインド旅行を終える時期までインドで作られた，ⓐ「タキシラ」のダルマラージカー遺跡で発掘された軍持形土器の図面，ⓑアジャンター石窟寺院の16号窟に描かれた壁画と26号窟の涅槃像に高浮彫で表現された軍持，ⓒインド仏

教の衰退期に造成されたエローラ8号窟の梵天の持物である軍持を資料として，グプタ朝時代の軍持の形を研究したものである。以上のグプタ朝時代の軍持形から，これらが中国形軍持にどのような影響を与えたかということについて考察する。

インドの軍持は紀元前後に作り始められ，グプタ朝時代には，僧家と俗家で普通に使われる容器であったように思われる。さらに軍持形には水羅機能の用途，すなわち浄水を採取し，飲用水として利用する目的と，仏教の殺生禁忌の思想から，必ず必要とされた水虫濾過の目的があった。中国軍持の流行の始まりは，グプタ朝時代に確立され，インド古典美術の影響によって規範化されたインド軍持形を求法僧などが律蔵とともに中国へもたらした結果である。従って，最初の中国形軍持は7世紀末頃の唐代から作り始められたと思われる。

本研究は7世紀末頃，インドを見聞した求法僧義浄の『南海寄帰内法伝』において仔細に観察され，記録されたインド軍持に関する内容を通じて，初期中国軍持形の発生とその年代を推定し，軍持の諸名称を定義したものである。そしてそれを参考として唐代の初期軍持の機能，形，細部構造とその機能，大きさ，製作年代，重要遺物に関して検証する。

一．軍持の語義

軍持はサンスクリツト語のクンチカに由来し，水瓶〈水を入れる瓶〉を意味する。インド仏教の律蔵が漢語で翻訳された時，Ka 発音を省略し，di を ji として発音して軍持と書いたのである。軍持以外にも君持，軍遲，君墀，捃稚迦と記録されている。現在，一般的に浄瓶という名称でよばれているが，浄水を入れる瓶という意味の「浄瓶」といわゆる「軍持」には実は根本的な相違がある。この理由は，軍持は瓶の胴肩部に添水台が附着されており，長頸部の上段には円形頂板が固定されている。頂板上部には尖塔のような形状の尖台がついていて，この部分から瓶の水を注ぎ出す。軍持は，添水台から水を入れて尖台から水を注出する特別な容器を指す時使う用語である。浄瓶というのは尖台と添水台がない一般的な瓶の形である細長頸瓶，宝瓶，甘露瓶などを指し，荘厳具的性格をもつ瓶である。

二．グプタ朝時代のインド軍持

マウリヤ朝（B.C 310－184年頃）以後，仏教の変遷に伴い変容してきた軍持は，紀元前後のクシャーン朝時代に作り始められたようである。マウリヤ朝の地層で発掘された「タキシラ」の「ビール丘遺跡の軍持形」[1] に見られる破片の図面は，器物の長頸部と添水台が部分だけ発見され，頸部以下の部分は欠損で胴体の有無は確認できず，また14cmというその高さは通常の軍持とは異なる。またクシャーン朝時代のインドの軍持遺物は破片だけが現存し，それらから推測すると，添水台の形状が水羅機能の用途として使うには不適合であり，尖台の大きさも

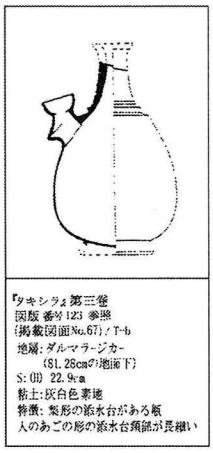
ひじょうに短く，穴もたいへん細くて，注出機能の用途を勘案すると軍持の尖台とは考えられない。それに対して，グプタ朝時代の軍持遺物はⓐ工芸的技法である轆轤成形によって作られ，ⓑ石窟の尊像の左手に把指され，浮彫であらわされており，ⓒ石窟の壁画に描かれている。軍持全体の形は完全であり，添水台・尖台部分が確認できる。また添水台と尖台の機能に関しては求法僧の記録などからも確認できるので，グプタ朝の軍持の形を原形として唐代の中国初期軍持が作られるようになったことが推測される。

ガンダーラ地方では，5世紀中頃以前に製作されたⓐ「タキシラ」のダルマラージカー遺跡から出土された添水台形軍持，ⓑ5世紀末頃に完成されたアジャンター16号窟左側壁面「難陀出家物語」の中，描かれた軍持，ⓒ6世紀末頃に完成されたアジャンター26号窟左側壁面に浮彫であらわされている仏の涅槃像の軍持，ⓓグプタ朝と仏教の衰退期の7世紀末頃作られた，エローラ8号窟の梵天の左手に把指された軍持形等の遺物によって，5世紀から7世紀まで，約3世紀にわたって製作されたグプタ朝期の軍持の類形を把握することができる。以上のグプタ朝の重要な軍持形などを図で例示すると次のようである。

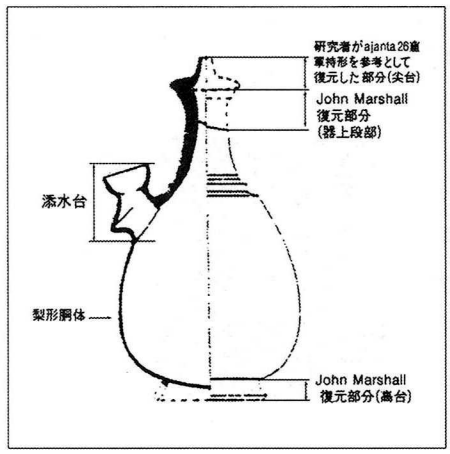
(1) 「タキシラ」の「ダルマラージカー軍持」[2] ◆図－1，図－2

この軍持は5世紀中頃（460－470年）に「エフタル」[3]の侵略をうけ，倒壊した仏教僧院ダルマラージカーの遺跡から発掘され，現在は失われてしまったものである。これは水羅機能として添水台の構造が完全なものであり，5世紀頃の軍持の資料として唯一のものである。図－1の図面から考察すると左側胴肩部に附着された添水台と添水口の発達した形と半月形の外反は，唐の軍持と同一である。添水台形は人間の顎を想起させる形が一段屈曲し，唐の軍持とは相違を見せる。器下段部の高台も，唐の軍持と同じ外高台の形式である。しかし，図面での表現であるので初期唐軍持の高台からみられる平底仮圏足であったということは確認できない。

器上段部の欠損で尖台の有無は確認できないが，図面の左側頸部



図－1　ダルマラージカー軍持形



図－2　ダルマラージカー軍持の尖台部分假象図

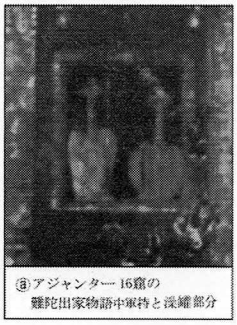
の断面の黒線が上昇しながら漸進的に太くなる。図面から推測すると，尖台があった器物だったことがわかる。また，器壁が上昇しながら太くなる状態は器物の頂上部に造形的に製作する部分があるとき，器物上段部分のほうへ粘土をひぱってあげる轆轤成形技法の特性のためである。従ってこの瓶は，図面に示すように細長頸瓶の形式の口縁部をもっているものではなく，尖台が蓋の頂板の上段についていたものといえる。添水台が必然的に尖台を同伴するという軍持形式の特性から予想してみても，尖台がある器物だったことは確かである。

(2) アジャンター16号窟の「難陀」[4] の出家物語の軍持　◆図－3

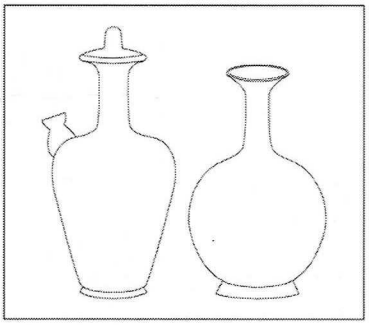
グプタ朝の古典文化が隆盛した時代（462－481年）に描かれたアジャンター16号窟左廊の壁画「難陀出家物語」の右中段の龕室に描かれた一組の双の瓶中，左側の瓶は軍持である。図－3ⓐは右側の中段の二個の柱の中に見られる軍持と澡罐を拡大したものである。壁画に描かれた二個の瓶の原形は工芸的技法である回転轆轤を使用して成形したため，左右対称の形になる。したがって，この二個の瓶の原形を復元すると図－3ⓑとして定型化することができる。長い歳月の間，顔料が酸化され揮発したので形が歪曲されてみえるが，細長頸の上部には蓋の頂板と，その上に，矮小な尖台が見える。胴肩部の左側には微かに添水台もみえる。右側の細長頸瓶は壁画が顔料の剥落によって尖台があるもののように錯覚されるが，実際には細長頸瓶である。この時代，軍持は澡罐を必須的に同伴するという律蔵の規範が確認されるよい例である。軍持は広肩形で成形材料が青銅である可能性もあり，澡罐は卵形で5－6世紀頃，中国と韓国で流行した荘厳具の長頸瓶形式を備えている。

◆図－3ⓐを工芸的なろくろ技法で定型化した図－3ⓑの図象（面）

「軍持著嘴澡罐口開」[5] の律蔵内容に着眼して軍持著嘴という語を添水台・尖台附着形軍持形として，澡罐口開は細長頸瓶，つまり澡罐として解釈する。軍持と澡罐は律蔵の記録では僧侶がもつ六つの物の中に入る容器であり，頭陀行の時，三衣あるいは坐具とともに必須的に持参する随物である。これは，法顕伝の「君墀と澡罐」という記録とも一致するし，この壁画が難陀が出家の直前に妻と惜別する場面であることを考慮すると軍持と澡罐，この一対の瓶は家庭で使用する生活容器であったともいえる。


ⓐアジャンター16窟の
難陀出家物語中軍持と澡罐部分

図－3ⓐ　難陀　出家物語　壁画



図－3ⓑ　工芸的技法として整型した図－3ⓐの図象（面）

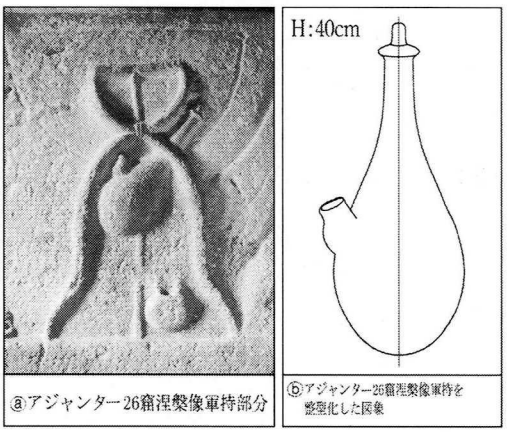
上記のダルマラージカー軍

持が梨形であるのに，アジャンター16号窟の軍持形は広肩形であることに注目するべきである。中国の場合は708年の埋葬されたのが確実な安菩夫婦墓から出土した軍持が陶製であったのに対して，以後，唐代の中国軍持は数多く青銅で作られ，大概広肩形になっている。また758年の神会墓の塔から出土した金銅軍持も広肩形であり，これらは埋葬年代が確定される唯一の資料である。

(3) アジャンター26号窟の涅槃像　◆図－4

6世紀末頃に建立されたアジャンター26号窟の左側内壁には，仏の涅槃場面が，浮彫であらわされている。この壁面に見られる軍持の胴体形は，ダルマラージカー軍持形と同じく，梨形で大体下広形である。これは5世紀中頃以前に製作されたとされているダルマラージカー軍持と同一の胴体形を見せるので，グプタ朝全時代を通じて下広形軍持がインドで製作されていたことがわかる。軍持が紐でしばられて壁面に45度の角度でななめにかけられている状態が，添水台と尖台の構造を精密に表現している。ダルマラージカー軍持形に比べて高台が省略された点と，添水台の角度が外反されていて，尖台の大きさが比較的小さい。瓶の高さに比べて矮小な尖台は，クシャーン朝時代にルパールで発掘された軍持形と類似している。

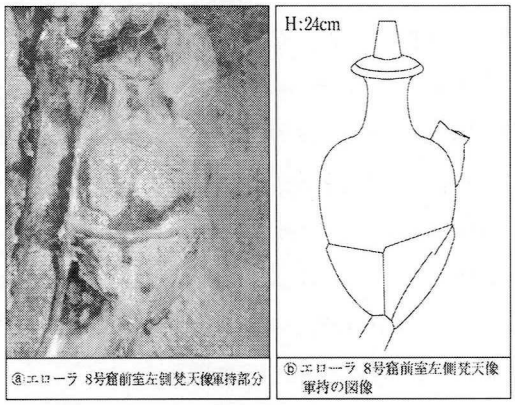
涅槃像の軍持がこのような問題点をもつのは，ろくろで成形する陶器の形を石面に高浮彫であらわす製作方法から現われる歪曲現象である。このような見解から，おそらくこの涅槃像の軍持の添水台はダルマラージカー軍持と同一形として考えることが可能である。図－4アジャンター26窟の涅槃像の軍持は轆轤で作ったものと推定する。図式すると図－4ⓑになる。底に高台がなく，丸いものは移動の時に水瓶を持ち歩くように袋に入れて紐をつけて肩にかけたり，壁や木の枝にかけたからである。5世紀中頃以前に製作されて使われた，ダルマラージカー軍持と共に梨形で，グプタ朝時代に流行した軍持であり，紐である空間にかけて吊す軍持形の典型である。釈尊仏の入寂時，哀悼する弟子たちとともに寝床の前面壁にかけられており，5世紀のグプタ朝時代の「荘厳具」[6]として軍持の重要性を示唆している。上の図－4ⓐの軍持下段部に見える袋は「濾水嚢」または「水羅嚢」で，僧侶が修道のため行う「頭陀行」[7]時の持物の中の一つである。



図－4ⓐを整型化して軍持で復元すると図－4ⓑと同じである

(4) エローラ8号窟梵天像の軍持 ◆図－5

仏教の衰退期である7世紀後半頃に製作された最後の仏教石窟が遺跡エローラ8号窟である。その前室の左側の龕室に描かれた梵天像は女性像と共に立っている。この梵天像の左手に把指されているのが軍持である。図として提示すると図－5ⓑのようになる。軍持の下段部が蓮葉で包まれているのを見ると，前述の涅槃像の軍持と共に高台がない卵形の胴体として把握され，頸部が細長頸形式で太くて短い形式になっているのが特徴である。



ⓐエローラ 8号窟前室左側梵天像軍持部分

ⓑエローラ 8号窟前室左側梵天像軍持の図像

図－5ⓐ エローラ8号窟梵天像の軍持

この梵天像の製作年代から見ると，「義浄」[8]のインド訪問の時期（675－695）と一致する。7世紀末頃，義浄がインドを巡礼した時，見た軍持形の胴体形も卵形であり，8世紀初頃，唐代に製作された一連の白磁軍持形及び西安陝西省歴史博物館所蔵の三彩軍持形とは同一の形であることを示している。したがって，これは7世紀末頃のインド軍持の唯一の資料であり，唐代の軍持との関連を示す重要な遺品であることを指摘しておきたい。

三．求法僧などの軍持に関する記録

中国最初の求法僧法顕（399－412）は，14年間インドを旅行した後，海路にて帰還の時「甚だ風浪にあって君墀（軍持）と澡灌（澡罐）を海の中にすてる」[9]という記録がある。また玄奘（629－645）は，17年間インドを旅行し，発刊した見聞録の中で，伊爛拏鉢伐多国の一・四小孤山聖跡を訪問し，「その南の石の上には仏の捃稚迦を置かれた跡がある。」[10]と記録している。インドでは仏の軍持は聖物とみなされており，この時玄奘はすでに消失した軍持の跡を参拝したのであった。法顕から玄奘に至るまで，つまり5世紀初頃から7世紀中頃まで約2世紀半の間，求法僧などの軍持に関する記録には軍持の形や細部の構造と機能に関して全く言及がない。

それに対して義浄は，675－685年までのインドを見聞し，『南海寄帰内法伝』の「水有二瓶」條を通じて軍持に対する詳細な内容を伝えている。また，義浄は軍持が添水台・尖台附着形の独特な外形をしているのは「水羅機能」[11]のため，必要であることを詳細に敍述しているので，7世紀末頃のインドと中国の軍持との関連性について知ることができる。また，義浄の帰国以後から，唐代の中国形軍持が作り始められたことも遺物を通じて理解できる。従って，四章で

は，インド軍持に関して詳細に記録した義浄の『南海寄帰内法伝』の内容を土台にし，主に挿図を通じて，軍持の形（軍持作法），水羅法，機能性，各部の名称，用途についてその詳細を明らかにしたい。さらに，インド軍持と唐代初期形軍持の関連性についても確認したい。

四．義浄の『南海寄帰内法伝』による軍持作法

(1) 軍持作法：水有二瓶條に「前略…其作瓶法．蓋須連口．頂出尖台．可高両指．上通小穴．麤如銅箸．飲水可在此中．傍邊則別開円孔．罐口令上竪高両指．孔如錢許．添水宜於此処．可受二三升．小成無用．斯之二穴恐虫塵入．或可著蓋．或以竹木．或將布棄而裏塞之…後略」[12] 原文を土台にし，軍持の使用法によって瓶の各部分に筆者がさらに詳しく説明を追加したものである。

1）尖台と蓋（頂板）部分の作法　◆図－6

ⓐ蓋須連口：蓋は細長頸の頂上部位の固定された円板をいう。この部分を頂板と呼ぶこともできる。頂板の上部には尖台が附着される。この語句から，蓋は頂板と尖台部分を称する。注出時，尖台上部の開けられた穴から水を注出するので蓋の上には必須的に尖台が附着しなければならない。ⓑ頂出尖台　可高両指：人間によってゆびの大きさが違うが，大抵に円板の頂部の上には尖台が両指二関節（ゆび一個の高さが2㎝程なので2㎝x 両指＝4㎝程）の高さでついている。ⓒ上通小穴　麤如銅箸飲水可在此中：尖台の上には銅箸の直径と同じ大きさの小さい穴が開けられている。唐代の銅箸の太さは0.6－0.7㎝程になり，尖台の注出口の直径もこれと同じく0.6－0.7㎝である。水を飲む時には尖台を通じて水を注出し盞や鉢に入れてから飲む。

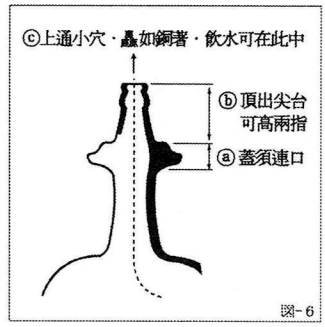


図-6

以上の尖台と蓋（円板）の部分の説明を図で示すと図－6のようになる。

2）添水台作法　◆図－7

ⓐ傍邊則別開円孔：傍邊とは上の語の意味では尖台や長頸部に近いところを示す言葉で軍持の肩部を指す。この肩部には円孔が別に開けられている。ⓑ罐口令上竪高両指：罐口とは水を入れる口，つまり添水台部であり，これは両指（ゆび二関節）の高さで上に向かって立てら

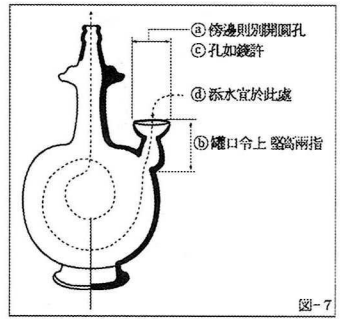


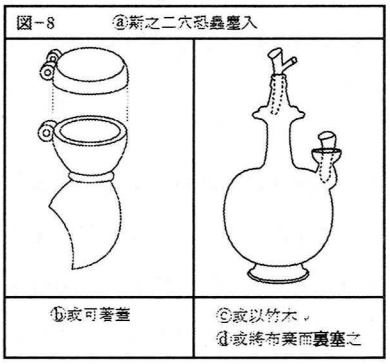
図-7

れて，その高さは尖台と同じである。ⓒ孔如錢許：罐口とは添水台をいう，添水口の幅は銅錢と同じ大きさで作られている。ⓓ添水宜於此処：水を瓶に入れる添水は，此処，つまり罐口から行う。したがって，罐口は添水台を指す語である。以上の添水台の説明を図－７で提示した。

３）胴体：ⓐ可受二三升：２升－３升容量の大きさで作られなければならない。ⓑ小成無用：小さく作ると役に立たない。

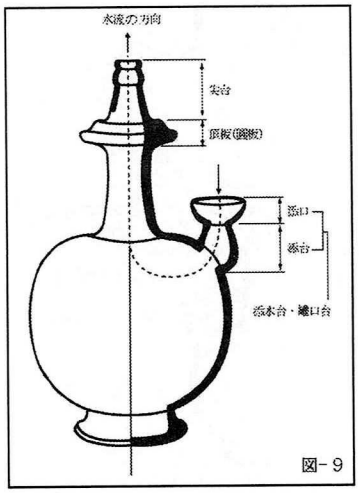
４）尖台と添水台の蓋物（蓋）　◆図－８

ⓐ斯之二穴恐虫塵入：この二個の穴から虫やほこりなどが入らないようにⓑ或可著蓋：蓋を作って被せるとか，ⓒ或以竹木：あるいは竹や木で，ⓓ或將布棄而裏塞之：あるいは使えない布で，尖台と添水台穴の内側まで深く塞ぐ。蓋がない軍持は水を入れた後，露出された二穴の尖台と添水台に塵や虫が入らないように竹や木の枝，あるいは棄布で内面の側まで深く押しとめさせる。図で説明すると図－８である。＊以上の図には参考のため原文の内容を必要な部分に挿入した。



(2) 名称定義　◆図－９

軍持の外形上の特徴から，そして特別な機能性に因って附着されている尖台・添水台などの細部の形から，律蔵と『南海寄帰内法伝』に明示された内容を参考にして筆者が整理し，名称を定義した。



図－９

１）軍持：添水台・尖台附着形浄瓶を軍持と称する根拠は「前略…苾芻不知羅有幾種，仏言羅有五種…中略…三者軍持…後略」[13] の内容で下記，図－９を参照すると軍持は採水する用途のため，僧伽では必須的な持物になったのである。水羅法によって浄水を得るため添水台が必要であり，注出の爲，尖台もかならず必要であった。尖台と添水台の位置，及び，添水された後，注出される水の方向を図で表示すると図－９のようになる。

⬅表示は水流方向である。軍持は水流の方向が逆流しないように造形される。『南海寄帰内法伝』の水有二瓶

條の内容にみられる罐口という名称は添水台という名称より軍持形ではより適切な用語である。

2）尖台：図－9の尖台部分の名称は『南海寄帰内法伝』の水有二瓶條の「其作瓶法…中略…頂出尖台…後略」[14] 中の文章から，尖台と言う語を引用したもので「蓋須連口．頂出尖台．可高両指」の内容は尖台であることを確実に説明している。

3）添水台（罐口台）：「水有二瓶」條の「前略…傍邊則別開円孔．罐口令上竪高両指．孔如錢許．添水宜於此処…後略」[15] 文中，「添水宜於此処」の添水と言う語に加えて，「此処」の語を「台」に変えて添水台と名称づけた。添水台の添は尖台の尖と同じ発音なので混同する。したがって「罐口令上竪高両指」の罐口という用語の次に「台」をつけて罐口台と呼ぶのが本来正しい名称である。しかし，添水台として表記する方法を今まで一般的に使用してきたので本研究でも添水台として表記した。以上，分析した水有二瓶條の内容で，整理された軍持浄瓶の形状と各部の大きさ，各部名称を提示すると図－10である。

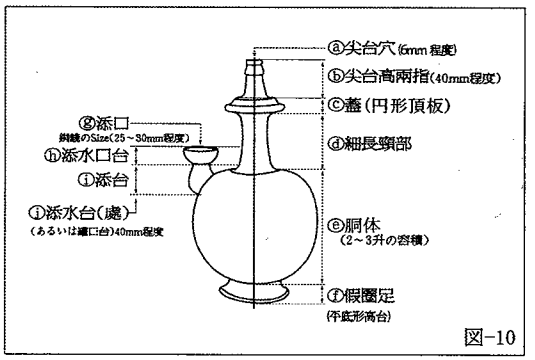


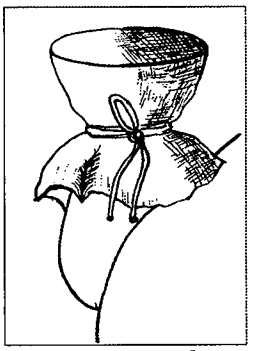
図-10

(3) 軍持水羅法 ◆図－11

軍持水羅法とは軍持によって飲料水をえる方法である。添水台に濾過網を設置すれば，この網を通過して軍持に入った水は衛生的であり，小さい虫を濾過させることで殺生禁忌の仏教的思想にも符合する。したがって，律蔵には厳格な法として次のように規定されている。「三つ目は軍持水羅方法で明紬を使って添水口を被せて塞いでおき，ほそい糸で添水口と添台間の首を縛って瓶を水の中に沈ませる。この時，添水口の半ぐらいが水の外側に出るようにする。もし完全に水の中に沈むようにすると水の注入がうまくできない。瓶の中に水がいっぱいになるのをまち，持ち上げて，虫が入っているのかを確かめる。虫が入っていると添水口の入口にすきまが出きているので，これは軍持とは言えない。」[16] 上の内容では，軍持の特殊な構造として浄水の採水方法が詳細に記されており，また僧侶たちの持物，あるいは随物での必須性を強調することだけではなく，軍持形瓶の作法を規定して水羅の機能を有効的に行うように指示されている。添水台に濾過網を設置する方法と水羅時軍持の傾斜角を図で提示すると図11－ⓐと11－ⓑのようになる。

図11－ⓐ：明紬を使って水羅するため添水口を塞いで，絲で添水口と添水台の間を縛った形態。図11－ⓑ：軍持水羅（濾過）法の実際傾斜角

図11－ⓐと11－ⓑは水羅網の設置と添水方法を図解したものである。「明紬で添水口を塞いだ後，尖台の軍持の蓋部分を把持して上記の図11－ⓑのように軍持を傾けて水に入れる。この時添水口の半分が水面に定置するように調整しながら水を軍持の中に注入させる。」[17] このような要領によって水を注入させる時，注入する水が瓶の内部に落ちる角度が垂直になるため，添水台に濾過網が附着されていても水の流れは円滑になる。また濾過機能のために軍持の添水台頸部は，細い糸で縛るため，かならず括れているように処理しなければならない。唐代の軍持などの添水台は，大部分がこの機能に適合するようになっている。



水羅時明紬で濾過網を設置した状態「南海寄歸内法伝」の水有二瓶條，軍持水羅時添水台の形

図11－ⓐ　水羅時添水台模様

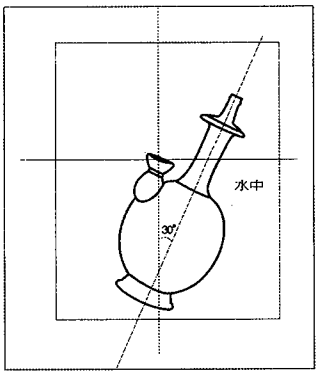
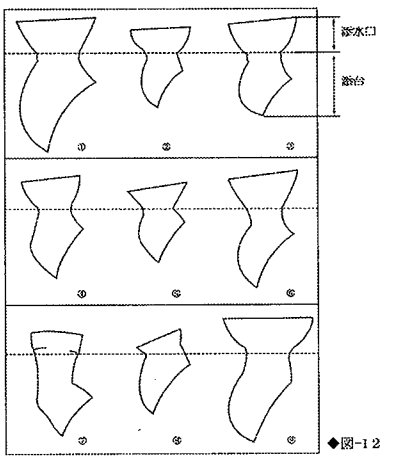


図11－ⓑ　唐軍持の水羅方法（添水方法）

◆図－12唐代軍持の水羅機能にあうように製作された添水台の一括図（添水台の頸が狭くなった形態図）



◆図-12

(4)　軍持の注出機能

水羅法に依って軍持の内側に貯蔵された水羅水は，尖台を通じて外へ注出する。この時，注出される水羅水は容器の中に貯蔵された水の圧力と軍持の傾斜度に比例して注出あるいは湧出される。つまり，水の強弱が調整できる。注出の時軍持の把持部分は長頸部である。図－13は添水から注出までの水流の有機的順序を図示した。

◆図－13　軍持水流の有機的機能

満水時には，軍持の傾斜度によって，水の出方に変化をつけることができる。満水時の傾斜度によって注出水の強弱を図で表現して比べると次のようである。図－13ⓐ注出水：薬水や浄水を貯蔵した後，飲用するため，注出する時の方法として主に小さいカップや鉢に注ぐ時に使う。図－13ⓑは湧出水：仏教集会の儀式で僧侶が浄水を遠いところまで振り撒くため，湧出させる方法であり，操作方法によって10m以上，水を飛翔させる場合もある。

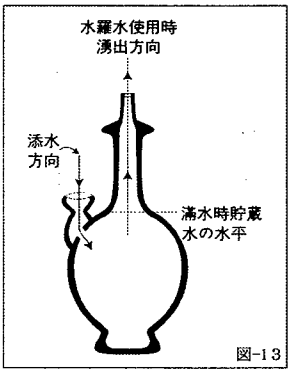
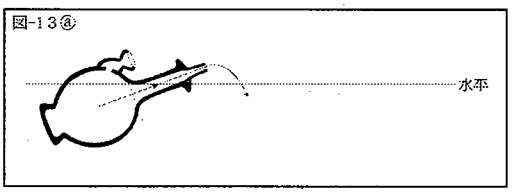
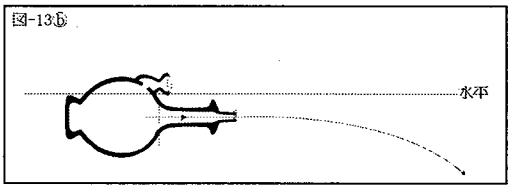


図-13





五. 7－8世紀のインドと中国軍持をめぐる背景

前章で言及したように，軍持は律蔵部の内容と深いつながりを持っている。その中でもチャルーキア朝下のインドを見聞し記録した義浄の『南海寄帰内法伝』と，その律蔵翻訳は，中国初期軍持と密接な関係を持ち，その内容に依拠して，唐代の中国初期軍持が製作されたことは確かである。これ以後，唐では軍持が幅広く流行するが，インドでは仏教の衰退とヒンドゥ教の隆盛により，仏教的信行と関係がある軍持は姿を消し，それ以外の浄瓶が使用され続けることとなった。

六. 軍持と澡罐の同伴形式

(1)法顕の記録：412年頃，法顕がインドから海路にて帰国の途中，風浪にあって海の中に捨てたという軍持と澡罐は，「君墀及澡灌　幷余物棄擲海中」諸幷余物中に「君墀と澡灌」と二つが共に記録されていることから同伴形式としての僧侶の持物だったことがわかる。

(2)玄奘の記録：玄奘の大唐西域記に伊爛拏鉢伐多国訪問時小孤山仏教聖跡に関する記録の中，仏の「捃稚迦」という記録があり，また「縛喝国」[18] 條に僧伽藍訪問の時，仏の澡罐があったことが記録されてある。この内容をみてみると玄奘も仏の浄瓶が軍持と澡罐の一対として成立するという意識をもっていたようにみえる。

(3)義浄翻訳の律蔵：「前略…君持幷添澡罐君持著嘴澡罐口開…後略」[19] の内容はすべての僧侶達が軍持と澡罐に水を満たしている。この場合軍持は尖台と添水台（罐口台）が付いている瓶であり，澡罐は細長頸瓶形式として上部側の入口が開けられている瓶であることがわかる。

(4)アジャンター16号窟壁画の「軍持と澡罐」：5世紀末に建立されたアジャンター16号窟難陀出家物語の壁画場面の龕室中に描かれた一対の瓶の中，左側器物は尖台と添水台附着形軍持であり，右側は細長頸形の澡罐である。この絵画から推測するとインドでは「軍持と澡罐」が

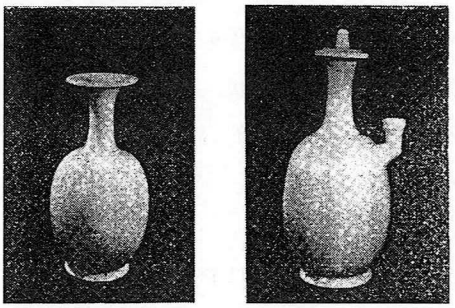
一対として僧侶や一般人の日常用器として使われたことがわかる。

(5)「安菩夫婦墓の軍持と澡罐」[20]：708年に埋葬された安菩夫婦墓から出土した軍持は7世紀末頃に記録された『南海寄帰内法伝』に明示された尖台の高さと比べて1／2程のものである。これ以外は，安菩墓軍持のすべての細部構造の大きさは『南海寄帰内法伝』に提示された比例と等しく作られている。白磁であるが酸化焔の焼成で木灰の雑塵が釉の上に溶けて附着している。この軍持は墓誌がいっしょに発掘され，年代が確認でき，細長頸瓶である澡罐と共に出土した。これから考えると，軍持は5世紀初頃から8世紀初頃までインドと唐において澡罐を同伴していたことがわかる。

七．初期の中国軍持遺物

(1) 「安菩夫婦墓」出土の白磁澡罐と軍持遺物 ◆図－14

添水台・尖台形軍持として胴体は卵形であり器物頂上には小さい穴が開けられている。肩部には添水台が付いており，添水口の直径は2.5cm，全体の高さは26cm，蓋の口径5.5cm，腹径12cm，尖台の高さは2.5cmであり，ねじ形の突起が彫られている。高台は平底仮圏足，すなわち平高台である。『南海寄帰内法伝』に明示された尖台の高さ（両指：2cm×2指＝4cm）に比べて本遺物の高さは1／2しかなく，矮小な尖台であり，添水台の形も不完全である。しかし，これ以外は『南海寄帰内法伝』に記録された軍持の形と構造，その細部は非常に類似している。



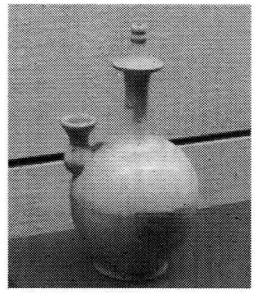
図－14

釉色は黄色調の白磁であるので酸化焔で焼成されたと推測することができる。唐代の軍持としては年代が上がる器物である。外形上の高台は内高台形に見えるが，高台の底側を裏返すと，平たく成形しているのが特徴である。つまり平底仮圏足（平たい高台）である。合葬された澡罐の高さは23cm，腹径12cmの細長頸瓶であり，頂上の外反された広い口縁部の直径は8cmである。釉色は黄色調であり高台もまた同様に平底仮圏足（平高台）であり，軍持と同じく邢窯産（洛陽南側）と推定される器物である[21]。

(2) 西安陝西省歴史博物館所蔵の白磁軍持 ◆図－15

西安市高陵県で出土した黄色調の白磁軍持であり，高26cm，腹径13cm，器下段部は施釉されず胎土が露出している。器頂上のⓐ尖台表面にねじ形のみぞⓑ尖台の長さⓒ酸化焔に焼成さ

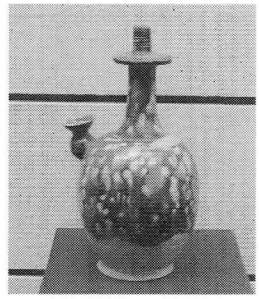
れ，黄色釉調に木灰が釉薬の上に溶けて附着した表面　ⓓ高台は，平底仮圏足（平高台）であり，その細部は安菩墓出土の軍持と同じ形である。添水台の構造は，添水口台と尖台の間が細く処理され『南海寄帰内法伝』に記録されている軍持形の水羅機能の要件に適合するように，製作したものである。したがって，本研究では安菩墓で出土された軍持と同一の形式と見なして，同時代の器物に分類した。



図－15

(3)　陝西省歴史博物館所蔵の三彩軍持　◆図－16

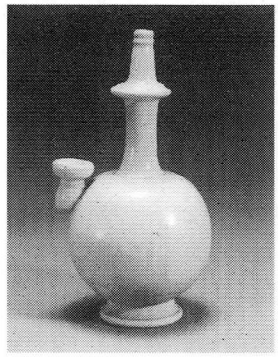
西安市三橋區挿楊村で出土した全体の高さ24㎝，腹径12.1㎝，緑，黄，白の華麗な三彩である。図－15の白磁と同じく，器の上段部と高台部分には施釉がなく，胎土が露出している。安菩墓白磁軍持と高陵県白磁軍持，そしてこの三彩軍持は，外形上すべての細部が類似しているので，同時代の様式として分類することができる。即ちⓐ尖台ⓑ蓋（円形頂板）ⓒ添水台の形状が同形であり，また素地（胎土）も同じく白土にて製作されている。



図－16

(4)　洛陽博物館所蔵の白磁軍持　◆図－17

洛陽龍門香山寺のＭ２墓出土のもの（香山寺唐墓Ｍ２）であり，高さは20.7㎝あり，高台は平底仮圏足〈平高台〉である。高台の下段部分が外側へ丸く巻き込まれており，胴体は球形に製作されている。この白磁軍持は，先述の白磁軍持と釉調が同じく黄色調であり，添水台と尖台の形が西安陝西省歴史博物館に所蔵されている白磁軍持と共通するので中国形初期軍持に分類される。



図－17

おわりに

５世紀初から中国の求法僧たちのインド訪問が始まり，中国人僧侶によって律蔵が翻訳された。律蔵は隋代に翻訳が始まり，それらが集大成されたのは，義浄が洛陽へ帰り，「根本説一切有部毘奈耶」等，諸律典を翻訳した700年を前後にした時代である。中でも義浄は，10年間インドの那爛陀滞留中，軍持製作に対する見解を現場での観察を通じて正確に記録した。『南

海寄帰内法伝』の水有二瓶條の軍持作法では，軍持と軍持各部分の大きさ，機能，使用方法を規定し，インドで多様な用途で使用されてきた軍持をⓐ中国形軍持として定形化し，ⓑ中国でも僧伽や俗家の仏教儀式で必要な用器として使用される契機を用意した。ⓒ軍持が特殊な外形の瓶である理由を浄水を採取する水羅軍持方法にあるとし，その方法も詳細に記述した。

したがって，唐代中国軍持の流行は，義浄から始まったといえる。7世紀末頃から8世紀中頃にかけて，インドでは実際に仏教が消滅してゆく期間であるが，中国では仏教がより急速に発展した。そして，軍持は仏教の発展に伴い東アジア一帯の地域でその使用が拡がったと推定される。軍持が必須的に澡罐と共に用いられたのはⓐ求法僧などの記録　ⓑインド仏教美術の精髄である石窟寺院の壁画　ⓒ安菩夫婦墓の遺物を通じて確認できる。

以上の内容を考察すると唐代に作られた中国初期軍持の特徴は次のように要約することができる。

1）初期中国陶磁軍持は尖台の長さが大概2.5㎝程の高さで短い。2）機能性の発達した添水台が附着されており，添水口台は水羅機能に適合するように口縁部が広く，幅は大概2㎝－2.5㎝で，当時使われた銅銭の大きさと同じである。添口の円と添水口から中をのぞくと，その形は銅銭のような二重の円状に見える。3）高台は通常，平底仮圏足（平高台）形になっており，胴体下部と高台部分は施釉されず胎土がそのままみえる。4）軍持と澡罐は一対として使用された。5）添水台は，瓶の中に水をいれる機能としてのみ使用するようになっており，尖台は注出口としてのみ使用される。6）瓶の各部分は，『南海寄帰内法伝』の水有二瓶條で規定された大きさと同じように製作された。7）7世紀末頃のエローラ8号窟前室左側龕室の梵天の軍持形は製作年代と形態から唐代中国初期軍持の原形であるといえる。

註

1）拙稿「インド軍持浄瓶に関する研究」意匠学会誌デザイン理論44　pp. 36-37

2）『タキシラ』第3巻に収録された図版番号123（図面掲載　No. 67の土器軍持）は寺院遺跡であるダルマラージカーから出土された。第2巻のpp. 44-66に詳細した内容が記録されている。

3）이주형『ガンダーラ美術』p. 293　四季節出版社　2003年

4）釋尊の異腹弟で仏教に帰依して釋尊の弟子になった人物。

5）『大正新修大蔵經』第24巻　1451　根本説一切有部毘奈耶雑事　巻第十五．P 274c
大蔵出版株式会社発行所，三鐘印刷株式会社　印刷所，東京，大正15年

6）仏教儀式に使われる工芸品。

7）僧侶が本人の修養のため旅行をしながら修行する方法。

8）唐の求法僧で671年海路でインドにわたって大乗仏教の大学があった那爛陀で675－685年まで10年間

学習した。律蔵研究に依る資料を多く残して『南海寄帰内法伝』を著述した。

9）『法顕伝』の「法顕亦以君墀及澡灌幷余物，棄擲海中」pp. 323-324参照
訳注解説。長澤和俊著，日本・雄散閣出版・双文社印刷所・平成8年9月

10）玄奘の『大唐西域記』水谷眞成訳　巻第十の十七国一・四の小孤山の聖跡の記録「次南石上則有仏置捃稚迦跡」pp. 308-311参照。中国古典文学大系第22巻，平凡社，昭和46年

11）『大正新修大蔵經』第24巻　律部三　1451　根本説一切有部毘奈耶雑事　巻第五　第1門　第6子攝頌之餘　p. 225c

12）義浄『南海寄帰内法伝』巻第一・第六　水有二瓶條　pp. 24-25参照
新文豊出版公司．中華民国台北．中華民国76年

13）『大正新修大蔵經』第24巻　律部三　1451　根本説一切有部毘奈耶雑事　巻第五　第1門　第6子攝頌之餘　p. 225c

14）義浄『南海寄帰内法伝』巻第一・第六　水有二瓶條　pp. 24-25参照

15）Ibid, pp. 24-25参照

16）『大正新修大蔵經』第24巻　1451　根本説一切有部毘奈耶雑事　巻第五　第1門　第6子攝頌之餘　p. 225c

17）Ibid, p. 225c

18）玄奘の『大唐西域記』水谷眞成訳　巻第一，三十二　縛喝国條　p. 38参照，平凡社昭和47年

19）『大正新修大蔵經』第24巻　1451　律部3　根本説一切有部毘奈耶雑事，巻第十五，p. 274c

20）洛陽古墓博物館編『洛陽古墓博物館』朝華出版社，1987年

21）中国中原文物：p. 24　1982年3月号
〈帯流瓷瓶：体如瓶，頭上有宝頂蓋，蓋与瓶身成一体，頂有小孔。盤口直折状短流〉